



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フーコーにおける啓蒙：現在性への反省としての哲学
Author(s)	宮野，晃一郎
Citation	哲学, 40, 57-71
Issue Date	2004-07-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35021
Type	departmental bulletin paper
File Information	40_RP57-71.pdf



フーコーにおける啓蒙

— 現在性への反省としての哲学 —

宮野 晃一郎

1 はじめに

フーコーは自己自身の仕事を振り返り、三つの主題があつたとしている。知の主題、権力の主題、倫理の主題である。知の主題において探求されたのは、人間がいかにして科学的知の対象となり、その知を探求する主体となつたのかである。権力の主題では、人間主体がいかにして真理をめぐる権力関係に従属させられ、また、自ら従属するようになるのが考察される。倫理の主題で問われたのは、人間がいかにして自身を自らの道徳的行為の主体として構成するのかわる。力点の置き方は異なりながらも、これら三つの主題をとおして彼が探求しつづけたのは、真理の問題と主体の問題、双方の関係の問題であつた¹。

さて、知、権力、倫理といった主題は何らかの一貫性をもつのだろうか。換言すれば、権力論から倫理学への移行が何らかの整合性をもつものとして理解できるだろうか。また、フーコーは自分自身の仕事をどのように反省したのか。フーコーの『啓蒙とは何か』を考察することによって、主題の移行にかんして明確な見解をもつことができるであろう。前半において、フーコーが着目しているのは、カントの『啓蒙とは何か』がカント自身の仕事の反省になつてい

また、カントが「現在性の存在論」とも呼ばれるべき批判の端緒を思考の歴史に導入した最初の哲学者であることである。後半においては、ボードレールの「現代性 modernité」を介することによって我々自身の存在に対する絶えざる批判である「哲学的エートス」、「歴史的存在論」を規定し、フーコー自身の知、権力、倫理の主題をもった仕事を包括的にある種の一貫性をもつものとしてとらえ返している。

本稿では、フーコーの『啓蒙とは何か』の概略を示しつつ、フーコーが現代に対する哲学的態度として規定した「哲学的エートス」を検討し、フーコーにおける啓蒙の意義を考察したい。

2 転機としての啓蒙

フーコーはカントの問いが明確な答えを与えられないまま現在にいたっているとする。現代の哲学とは啓蒙という出来事とは何かを問うものである。その出来事が部分的ではあるにしても、現在の我々の存在、我々の思考、我々の実践を規定しているからである。このような見解を得るにあたって、フーコーはカントの啓蒙論をどのように読解したのだろうか。この点について、マリアパオラ・フィミアニの論考『フーコーとカント』を取り上げることによって検討したい。フィミアニはフーコーと同様、カントのテキストが現在性の問題を措定しているとともに、カントの自身の仕事への反省であるとみなしているからである。

フーコーは、カントが哲学的思考の歴史のなかに「啓蒙とは何か」という問い、すなわち、「現在性 actualité」についての問いを導入した初めての哲学者であるとみなしている。その問いは過去や未来に関連づけられた現在を理解するのではない。純粹に「自分自身の現在」についての反省である。つまり、「どのような差異を、今日は昨日に対して導入するのか」(WE, p.364)を探求するのである。フーコーはカントがどのように現在についての哲学的問いを立てたのかを

理解するために、カントの啓蒙論の特徴を描き出している。

まず、フーコーが着目するのは、啓蒙が我々を未成年状態から解放するプロセス、いわば「出口」として描かれている点である。未成年状態とは、理性を使用しなければならない領域で他者の権威に従属している自律性を失った状態である。つぎに、カントがこの「出口」を両義的に示していると指摘する。カントが述べるには、人間が未成年状態にあるのは人間自身の責任であり、そこから脱出して成熟した状態にいたることができるのは人間が自身を変化させることによってのみである。また、啓蒙は地球上のあらゆる人間の政治的社会的存在にかかわる歴史的な変化であるのか、もしくは、個別の人間存在の人間性を構成しているものに影響を及ぼす変化であるのかという両義性をもつ。このような両義性は、フーコーによれば、啓蒙が倫理的かつ政治的問題としてあらわれることを示している。人間が未成年状態から脱する条件は、理性を公的に自由に使用できるときである。しかし、それが保証されるのは、啓蒙という人類全体にかかわる一般的な出来事に、諸個人が可能な限り厳格に従っている限りにおいてだからである。

フイミアニはフーコーの知の主題と倫理の主題を結びつける試みをしているが、それはフーコーの全ての仕事を「カントの焼き直し」と位置づけることによってである。その際、次のような仮説を立てる。フーコーの全ての著作をとおして「臨床」の要素と「倫理」の要素の収斂があり、それらは近代的主体の独自性の産出とその対立において両立するのだが、これら二つの要素をつなぐうえで「批判」という第三の要素がその条件と前提になるということである。この仮説の検討を進めるにあたって、フイミアニはフーコーの探求における臨床と倫理を一般的に分岐したものとして考察される二つの総体ととらえ、それらの比較と連続を検討しなければならないとする。前者はフーコーの初期の作品（『狂気の歴史』、『臨床医学の誕生』、『言葉と物』など）で検討されたことであり、主体の客体化と服従化のシステムの産出を再構成する。後者は後期の作品（『性の歴史Ⅱ…快楽の活用』、『性の歴史Ⅲ…自己への配慮』など）で検討されたことであり、主体にかんする吟味をとらえ返し、近代性を哲学的倫理的に問題構成する。フイミアニはフーコーの前期と後

期の仕事を整理したうえで、『言葉と物』の後に「啓蒙」の問題をおくことができると主張する。『言葉と物』がすでに、過去の歴史から今なお現在のであるものへの移行、古典主義時代から近代への移行を再定式化するという啓蒙的な問いの端緒を含んでいるからである。

フイミアニはカントの啓蒙論を「現代性そのものを問う限りで現代性を基礎づけるひとつの振る舞い」であるとし、これ以降「現代性とは、もはや過去との関係ではなくて、現代性そのものとの関係という問題を指定する」(FK, p.20)ものだとする。つまり、カントにおいて啓蒙について問うことは、まさに「現在」についての問題であるということである。

フイミアニは啓蒙を未成年状態からの解放のプロセスと踏まえることにより、それを他者の指導されたままにならないうこと、自ら理性的に思考することであると規定する。ここに批判が結びつけられるという。フイミアニによれば、啓蒙は批判によって規定される知の可能な諸条件と理性の公的な使用の諸限定の内部に思考する自由をとどめているからである。しかし、その自由は国家の合法性と権利が課す自由への制御のうちにも含まれている。ゆえに、批判はいかに統治されないかという問題から切り離されえない。批判は「自身の限界を認識し、自身と権力の関係を変容できる自由の行使の問題を指定」(FK, p.23)するのである。カントの批判的反省は理性の正しい使用の条件であるが、この条件というのは啓蒙が自由の具体的な行使として考察される条件なのである。批判と啓蒙はカントにおいて分かちがたく結びついており、また、倫理と結びついているのである。このような文脈において、フーコーは「道徳的政治的態度」としての批判的態度をカントから取り出したのだとフイミアニは述べる。それは「主体が、権力の諸効果についての真理と、真理の言説についての権力とを問う」(FK, p.37)ような態度であり、他者による支配の一切を拒否し、そこから「別あり方をしようという道徳的傾向としての批判的態度」(FK, p.41)である。

実際、フーコーは次の二つの点を強調している。第一は、『啓蒙とは何か』と三批判書との結びつきである。なぜなら、

啓蒙のプロセスにこそ批判が必要であるから、つまり、「批判とは、人が認識しうること、なすべきこと、希望しうることを決定するために、理性の使用が正当でありうる諸条件を規定する役割をもつ」(WFE, p.567) からである。第二は、歴史について書かれた一連のテキストとの関連である。それらが時間の内在的な目的性と、人類の歴史的目標の決定を指摘しているのに対して、「啓蒙の分析は、啓蒙を人類の成人状態への移行と定義することによって、このような運動全体とその基本的な方向とに関連する現在性を位置づけている」(WFE, p.567-568) のと同時に「いかに、この現在のな契機において、各人がある種の仕方で全体のプロセスに責任があるのかを示して」(WFE, p.568) もいるからである。

フーコーは以上の点からひとつの仮説を提出している。カントの啓蒙に坎んするテキストが、三批判書における批判的反省とその後の歴史についての反省とを連結する契機となっているのではないかということである。それは、カントが自分自身の仕事の現在性について反省する転機となっていないかということである。フーコーによれば、このようなカントの反省的態度に「現代性」の態度の端緒を見出せるという。「現代性」の態度とは、ボードレールを取り上げることによって現在に対する鋭敏な意識的態度として規定され、さらに「哲学的エートス」として練り上げられるものである。このような態度を、フィミアニはフーコーにおける「道徳的政治的態度」としてとらえている。

フィミアニは、カントの啓蒙論が三批判書と歴史についてのテキストとの連結点にあたるというフーコーの仮説に同意している。そして、フーコーの啓蒙に坎んするテキストが彼の研究全体の回顧的で遠近法的な機能を獲得していると指摘するのである。つまり、このテキストがフーコーの前期と後期の間のある種の移行と連続性を確立しているということである。ここに、フィミアニは「カントの焼き直し」を見出す。フーコーはカントを再考することによって、前期と後期の思考の一致を補強するのに役立つ批判の要素を練り上げたのだと主張する。フィミアニにとってそのことは、カントが超越論的批判と歴史に坎んする著作とを『啓蒙とは何か』によって連結したのと同様の作業なのである。

分自身を複雑で困難な練り上げの対象とみなすことである。現代的人間とは「自己自身や、自身の秘密、自身の隠された真理の発見へと向かう人間ではない。それは自分自身を自ら創出しようと努める人間のこと」(WE, p.571)なのである。

フーコーはこのような現代性の態度を「哲学的エートス」として規定する。そこで強調されるのは、一方では、現在への関係、歴史的存在様式、自律的な主体としての自己自身の構成を同時に問題化するある型の哲学的問いが啓蒙に根ざしていること、他方では、我々を啓蒙に結びつけるのが教説への忠誠ではなくて、哲学的エートスの絶え間ない活性化であるということである。このエートスは、我々が語ること、思考すること、行為することへの我々の歴史的存在論をおとした絶え間ない批判として特徴づけられる。

フーコーはさらに、哲学的エートスの消極的な面と積極的な面を規定する。消極的な面とは、フーコーが「啓蒙の恐喝」と呼ぶものと「人間主義」の拒否である。「啓蒙の恐喝」とは、啓蒙に対する単純で権威的な二者択一を迫るものであり、賛同すれば「啓蒙」の理性主義の伝統の中にとどまることになるし、反対すればその合理性の諸原理から逃れようと試みることになる。どちらかの立場に立てば他方からの非難を受けることになる。また、人間主義と啓蒙との混同を避けなければならないとする。フーコーにとって、啓蒙はひとつの出来事、もしくは、諸々の出来事と複合的な歴史のプロセスとの総体としてとらえられる。それに対して、人間主義の主題系はそれ自体に明確な根拠づけを欠くものであつて、「少なくとも十七世紀以来、つねに、宗教、科学、政治から借用された人間についてのいくつかの考えに支えを見出さざるを得なかった」(WE, p.573)からである。フーコーは「啓蒙」の理性主義の枠組みの内にとどまることも外に出ることも拒否する。人間主義に対して、我々の歴史的存在への絶え間ない批判と、我々の自律における我々自身の絶え間ない創出の原理である哲学的エートスを対置しうる可能性を提示するのである。

フーコーは「啓蒙の恐喝」という二者択一の境界線に立つ態度を哲学的エートスの積極的な面として特徴づける。そ

のような批判的態度は限界を反省することだが、カントのように認識が越えることのできない限界を知ることではない。そこで問題となるのは、「我々にとって普遍的、必然的、義務的なものとして与えられているもののなかで、単独で、偶然で、恣意的な強制に帰せられているものの部分はどのようなものか」(WE, p.574)を問うことである。要するに、「必然的な制限の形式において行使される批判を可能な乗り越えの形式における実践的批判に変容すること」(WE, p.574)である。したがって、フーコーにとって批判は普遍的価値をもつ形式的構造の探求において行使されるのではない。我々を言説、思考、実践の主体として構成し、そのように認識させるように仕向ける諸々の出来事とおした歴史的調査として実行されるのである。この意味において、批判はその目的性において系譜学的であり、その方法において考古学的である。このような歴史的Ⅱ批判的態度は、包括的であり根源的であることを要求するあらゆる企てを拒絶しなければならない。なぜなら、人間主義が陥ってきたようなもつとも危険な伝統を更新することにはかならないからである。フーコーは「我々自身についての批判的存在論に固有の哲学的エートスを、我々が乗り越えることのできる諸限界の歴史的Ⅱ実践的実験として、つまり、自由な存在である限りでの我々自身に対する我々自身の作業として」(WE, p.575)規定するのである。

フーコーによれば、カントの啓蒙論は批判的反省と歴史についての省察との連結点にあり、カントは「現在性」という問いを最初に提起した哲学者である。しかし、ノリスはそこにカントの啓蒙の問いがもっている両義的な特徴があると指摘する。その特徴は「一方では、ある非常に特殊な歴史的条件への応答において生じるのであり、他方では、時間を超越した自己明証的な真理にかんしてアプリオリに演繹された人間の諸能力(理解、理性、判断)の行使をとおしてこれらの条件を超越することを要求する」²のである。フーコーにおいて、前者は啓蒙の問いから取り出した批判的態度に合致するものだが、後者は人間主義的もしくは主体中心的哲学としてみなされうる。フーコーが「哲学的エートス」といった批判的態度を導くには、後者の特徴を排除した形式でなければならぬ。ノリスによれば、フーコーはカント

の優先事項の順序を二つの点で逆転させているのである。第一に、超越論的（批判的）理性を最近の思想史におけるエピソードに落とし、第二に、普遍主義的な真理と、権力と知の関係における偶然的な出来事とを同一視しているのである。したがって、フーコーが用いる批判の概念は、カントがそれに割り当てたものとは異なる意味をもっている。批判は、認識論上の諸根拠にかんする問題ではなくて、絶えざる自己変容の問題となっているのである。

4 フーコーにおける啓蒙の意義

フーコーの『啓蒙とは何か』がカントの啓蒙論と同様に彼の前期の仕事と後期の仕事をつなぐ転機に位置し、彼の研究全体の回顧的で遠近法的な機能をもっているということ、また、カントから純粹に現在性を問題とする哲学的批判的態度を引き出しているというフィミアニの主張は、説得力をもつように思われる。しかし、フィミアニが述べるように『言葉と物』のあとに、つまり、知の主題系のあとに啓蒙の問いを直ちに結びつけることができるだろうか。確かに、フィミアニはフーコーが「道徳的政治的態度」としての「批判的態度」をカントから取り出したのだとしている。だが、フィミアニ自身がその論考の結論部で認めているように、「フーコーによるカントの読み方に関心があったとすれば、そのことは、カント主義や、理性批判、歴史と政治の主題、法理論と世界主義、実用的な人間学のプログラムそのものが、今日、政治と哲学の理論にゆだねられているという諸問題を討議する意図のうちにあるのではない」(FK, p.135)。したがって、知、倫理の主題と権力の主題とをどのように関係づけるのかという問題を棚上げしてしまっているのである。さらには、フーコーの全ての仕事のカントの仕事の焼き直しであるとは結論づけられないであろう。

ノリスの論点からすれば、フーコーの仕事が単なる「カントの焼き直し」ではないことが理解される。それはフーコーが「啓蒙の恐喝」を非難するときにもあらわれている。フーコーはカントとの対決をとおして、彼が啓蒙と同一視して

いる「絶えざる批判」に自身の仕事をさらしながら、「哲学的エートス」を練り上げ、我々が依拠している政治的、社会的、制度的、文化的な出来事、すなわち、権力論で扱われたような主題を問いつづけているのである。

フーコーはこのような批判的作業に際して次のような反論があることを想定している。すなわち、我々が無自覚で統御できないような一般的な構造によって規定されてしまうのではないかという反論である。フーコーはそのような限界があることを認める。だが、自分自身の仕事を包括的に振り返りながら、「我々の諸限界とそれらの乗り越えについて我々が行う理論的かつ実践的な経験は、つねにそれ自体限定され、規定され、それゆえやり直されなければならない」(W&E, p.575. 強調筆者)と主張する。このような批判の全作業は、ある種の一貫性をもってなされるがゆえに、絶えず繰り返されなければならないのである。その一貫性は、賭金(目的)、均質性、体系性、一般性として整理される。

批判的作業の賭金は、「能力と権力の(諸関係)の逆説」によって示される。諸能力の獲得と自律性の増大との関係のうちに、様々なテクノロジーをとおして権力関係(集団化すると同時に個別化する規律化、社会の要請や人口の領域で行使される規範化)が張り巡らされるということは、フーコーが諸々の著作において研究してきたことである。したがって、賭金とは「いかにして技術的諸能力の増大と権力関係の強化を切り離しえるか」(W&E, p.576)を問うことである。

また、批判的作業は「実践的総体」と呼ぶうるものの研究に導く。研究対象の均質性とは、諸々の振る舞い方を組織する合理性の諸形式(実践のテクノロジー的側面)と、他者との関係においてゲームの規則をある程度自身で変更する実践的諸体系のなかでの行動にともなう自由(実践の戦略的側面)とを同時に対象とすることである。そして、「我々自身についての批判的存在論」は、それぞれの領域に対して、いかにして我々は我々の知の主体として構成されたのか、いかにして我々は我々の行為の道徳的主体として構成されたのか、という問いに対応する体系性をもっているのである。実践的総体は、事物に対する支配の諸関係の領域(知の主題)、他者に対する行為の諸関係の領域(権力の主題)、自己自身との諸関係の領域(倫理の主題)に属

している。これらの領域は、お互いに関係性をもっているのである。最後に、このような批判的態度は局所的であるがゆえに特殊であるが、我々が属する特定の社会という尺度においては一般性をもつ。それは、フーコーの諸々の研究が、理性と狂気、疾患と健康、犯罪と法の諸関係の問題、性的諸関係に与えられるべき立場の問題などを取り上げてきたという意味においてである。フーコーは、それらの一般的な射程をもった諸問題を、それらのもつ歴史的に単独の形態において分析するのである。

フーコーは、以上のような哲学的エートスという批判的態度は、考古学的であると同時に系譜学的な研究において方法論的一貫性をもち、また、知、権力、倫理の主題の一般性が問題構成される歴史的に単独な諸形式の定義において理論的一貫性をもち、さらに、歴史的に批判的反省を具体的な諸実践の試験にかけることに注がれる入念さにおいて実践的一貫性をもつと主張するのである。

さて、フーコーの啓蒙論がフーコー自身の仕事への反省であり、カントの批判的態度の変形である「哲学的エートス」の規定を行っているものであることを確認した。しかし、なぜフーコーはカントの『啓蒙とは何か』を取り上げたのだろうか。それは、フーコーが啓蒙の第一の特徴を「出口」であると規定したことと、また、批判的作業の賭金、すなわち、「いかにして技術的諸能力の増大と権力関係の強化を切り離しえるか」という問いとにあらわれているように思われる。

フーコーの権力論の諸研究は、規律化権力と規範化権力の浸透によって、いかにして諸個人が客体化、服従化を被るかであった。その研究は、「我々自身の歴史的存在論」を遂行することによって、我々が外見上必当然的に受け入れてきた存在規定の限界を見極めるためになされる。しかし、それは我々がその限界の内部にとどまることを意味するのではない。その乗り越えの可能性を探るためなのである。だからこそ、フーコーにとって、啓蒙は「政治的問題」としてあらわれるのである。そして、倫理の主題は権力諸関係における「現代性の態度」としての自己変容の問題として探求さ

れることになる。他者によつて従属させられた自律を欠いた状態から脱け出し、「自己自身や、自身の秘密、自身の隠された真理の発見へと向かう」のではなく、「自分自身を自ら創出する」可能性を問うのである。

フーコーは、現在の我々は成熟してはいないし、成熟するかどうかともわからないと述べる。しかし、彼はカントの啓蒙論からある哲学的態度を見出したのであり、「我々自身の歴史的存在論を、ひとつの理論、教義として、または、蓄積される知の恒常体としてさえみなすのではなく、ひとつの態度、ひとつのエートスとして、我々が今存在していることへの批判が、我々に課された諸境界の歴史的分析であると同時に、それらの可能な乗り越えの実験でもあるような、ひとつの哲学的生として理解しなければならない」(WFE, p.577)と結論づけるのである。

フーコーによつて、哲学の役割は普遍的な真理を標定することではない。それは、今現在、この時代に生きている我々とはいかなる存在であるのかを問うことである。つまり、真理そのものを問うのではなくて、我々が真理だと思っていることがどのような条件のもとで立ち表れ、我々がそれに関係づけられているのかを問うのである。フーコーはこのような哲学の仕事を、我々自身についての歴史的存在論に対する絶え間ない批判的作業であると見る。フーコーが啓蒙から取り出した哲学的エートスは、フーコー自身の現在性にかかわる哲学的態度であるとともに、権力諸関係のなかで倫理的主体がいかに可能であるかという我々の生にかかわる一般的な問題も示しているのである。

5 おわりに

カントの「啓蒙とは何か」という問いは、フーコーによつて、現在性に対する批判的態度へと変容された。フーコーは晩年にいたるまで、それまでの自身の仕事を絶えざる批判によつて再活性化させているということが出来る。このような批判的作業はフーコーの探求全体に通底するものである。

フーコーの批判的態度は、知と権力にかんする既成の見方を変え、様々な領域が絡み合った複合的な知と権力の関係の分析を可能にする。権力関係は抑圧と禁止が支配する否定的なものではなく、多様な知、多様な関係性を産出するものなのである。そして、現在の我々の在り方を見極めることによって、権力関係のなかで服従化された主体を倫理的な主体として構成し、そのなかで自己を変容させ、知と権力との関係をも変容する可能性を提示しようと試みているのである。我々は、自己との関係における倫理的主体として、真理のゲーム、権力のゲームのなかで戦略関係を働かせ、自己のみならず他者との関係性を変容しながら自由の実践を行使し、世界の在り方を変えていくのである。

フーコーは、『性の歴史』の当初の計画を変更し、権力の主題から倫理の主題に移行することを選択した動機を、「若干の粘り強さをともなう実践されるに値するであろう、いずれにせよ唯一の種類の好奇心であり、つまり、認識するのにふさわしいことを自分のものにしようとする好奇心ではなくて、自己自身からの離脱を可能にする好奇心」(UP, p.15)であると述べている。フーコー自身の生の様式自体が、また、哲学的態度自体が、恒常的な批判的作業をともなうものであり、自己の変容を可能にする倫理的主体化の様式をともなう自由の自己実践なのである。そのような観点からこそ、知の主題、権力の主題、倫理の主題の結びつきを考察しなければならないであろう。

引用文献表

- UP: Michel Foucault, *Histoire de la sexualité: L'usage des plaisirs*, Gallimard, 1984.
WE: Michel Foucault, *Qu'est-ce que les Lumières? (What is Enlightenment?)*, in *Dits et Écrits IV*, Gallimard, 1994.
FK: Mariapaola Firmani, *Foucault et Kant*, trad. Nadine Le Lirzin, L'Harmattan, 1988.

注

1 フーコーは権力論を扱った『性の歴史Ⅰ…知への意志』から八年を経て、倫理を主題とした『性の歴史Ⅱ…快楽の活用』と『性の歴史Ⅲ…自己への配慮』を死の間際に発表した。『性の歴史』の当初の企ては、『知への意志』を序論とした全六巻構成の予定であり、おそらく、七〇年代にコレージュ・ド・フランスの講義で展開された「統治性」の研究を踏まえた著書を刊行する予定であった。しかし、その計画は大幅に変更された。『快楽の活用』の「序文」によれば、まず、「セクシュアリテ」という概念を確立するのは、(1)様々な認識領域の発展、(2)宗教的、法律的、教育学的、医学的な諸制度に支えられた諸規則と諸規範の配置、(3)「諸個人が、自身の振る舞い、義務、快楽、感情や気持ち、夢などに意味と価値を与えるようになる仕方の変化」(UP, p.10)といった事柄の関係によってである。しかし(3)のような倫理的主題を探索するためには、分析の道具立てをもたなかったため、フーコーには「理論的立場の移動」が必要であったのである。そして、『性の歴史』の第2巻以降においては、「自己と自己との関係における真理のゲームと主体としての自己自身の構成とを研究すること」(UP, p.13)を目的としたのである。

2 Christopher Norris, "What is enlightenment?": Kant according to Foucault, in *The Cambridge Companion to FOUCAULT*, edited by Gary Gutting, Cambridge University Press, 1994, p.168.

L'interprétation des Lumières selon M. Foucault

— La philosophie comme la réflexion
sur l'actualité de nous-mêmes —

Koichiro MIYANO

Le texte de ses dernières années, nommé "Qu'est-ce que les Lumières?," nous montre que l'attitude critique et philosophique de M. Foucault était traversée par les idées des 'l'*êthos* philosophique' et 'l'ontologie historique de nous-mêmes' depuis l'*archéologie* et la *généalogie*. Nos positions sont qu'il est à la fois la reprise même de ses travaux et la charnière de la thème du savoir, celle du pouvoir et celle de l'éthique, y trouvent-elles leur charnière, et donc qu'il est également au point de départ de envisager son éthique.